アナグラム考　☆ソシュールのアナグラム研究は何を語っているのだろうか？
※ソシュールのアナグラム研究ノートは膨大であり、その読み込みとしてジャン・スタロバンスキーの『ソシュールのアナグラム』が水声社から（2006/03/10）出版されている。

①ソシュールの晩年、囚われたともされる「アナグラムの研究」

ソシュールの晩年、古い時代の詩歌、ギリシャ・ラテン詩、ヴェーダ詩等の伝承、碑文等の文字言語表象、その中に見られる言語音声の響き合いに関する研究が「アナグラムの研究」である。複数の言語主体がポリフォニー的に言語音声を重なり合わせ、あるテーマ語とされる地名などの音の断片が、文章の中に散在されつつ進むという、古代の碑文など、その響き合い、その音声表象を扱った研究が、アナグラム研究である。

さらにソシュールはアナグラムは、古代のみならず、当時のラテン詩人における詩作上のテクニック、秘儀として継承されているという文脈で、その検討を加えようとしていた。

若き日のたぐいまれなる秀才、比較言語学の薫陶「『覚え書』や『サンスクリットの絶対風格』の著者、そしてその壮年期のジュネーブ大学での「『講義』、晩年の「アナグラムやニールンベルゲンの研究者」[1]、これらが「3 人のソシュール」とされている。そのソシュールが最晩年に没頭し、そして中途挫折されたままに残された研究が「アナグラム研究」である。

ソシュールは、現存する文字資料（碑文・伝承・神話等）に当たって、一つの碑文、あるいは伝承文の文頭あるいは文末などに、のちに**「テーマ語」**として定義する、一つの象徴的な単語（人名や地域名など）が、その「テーマ語の音声」の構成部分の母音・子音が、単音・復音として分散されてあり、ある範囲内の文章中に込められているという事を発見し、その音が分散される手法の中に一定の厳密な規則性、法則性を見出している。その「テーマ語（人名や地名）」の音断片を散りばめながら構成される、あるいはそうした音声を散りばめつつ進行する古典詩、あるいは伝承文における、音声と意味の展開の中に、文章の明示的な意味に加えて、それに重ね合わされた象徴的な語彙（テーマ語）が埋め込まれるという、その響き合い、ポリフォニー性についての、検討を重ねている。

文章全体の意味と重層する、あるいは重ね合わされて響く意味（イメージを含む）である「テーマ語」、それを抱えてのポリフォニー的な響きを聞き出して、そのテーマ語を構成する音声の単位である音素、その中の母音や子音の分散に、「厳密な規則性、法則性」様式性を確認し、そのような法則性を抱えた作詞の手法をアナグラムとして捉えているわけである。

やがて当時の高名なラテン詩人の作詩の技法との共通性を認めて、アナグラムの技法を

[1] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P45　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

踏襲していると思われた、ボローニア大学の教授でもあったジョバンニ・パスコリにあてて、1909 年の春に 2 通の手紙を書いている[2]。その二通目の中の以下の具体的な質問に対して、パスコリからの返事は得られず、ソシュールはそれをもってアナグラムの研究を放棄したとされる。この事情は丸山圭三郎を含めて、後世のソシュールの言語論の研究者にとって、ソシュール研究においての、「謎」とされている。

② ソシュールのアナグラム研究の時期：

ソシュールは、12 才から 13 歳の夏に、互いの別荘が近く家同士の親交の有った、『印欧語の起源』を著して言語古生物学を創始したアドルフ・ピクテをしばしば訪ねており、彼の最初の論文をピクテに送ったという。やがて 1875 年、18 歳のソシュールはジュネーブ大学に入学し、翌年（1876 年）春には 10 年前に設立されたばかりのパリ言語学会に論文を送って入会を申し込み、この論文はその正月の学会誌を飾ったと言う。そして 1877 年から計画していた「広汎な研究」を 1878/12/の 21 歳の誕生日を迎えた直後に完成させて「《インド・ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚書 Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo‐européennes》として出版している。

今では、この覚書を巡って「これはすでに従来の歴史言語学への批判の書であり，その関係論的視座は 1894 年ころまでに完成したと思われる一般言語学理論と通底するもの」（コトバンク）とされるのだが、当時ライプニッツでは「覚書」は無視に晒され、ソシュールへの個人攻撃などと、この全体的な理論的枠組みは理解され難く、若きソシュールの心的衝撃はいかばかりであったろうか、とされている。

こうした傾向は、ドイツの言語学会で 1900 年のヒルトによる『印欧語の母音交換論』、さらには 50 年後の 1927 年のクリオヴィッチによってヒッタイト語の h に関する研究、1941 年のヘンドリクセンによる、ソシュールが仮想した A に相当する喉音の発見があって、やがてソシュールへの評価は浸透するのだが、ソシュール自身は 1880 年から 1891 年までパリに滞在、この間は「フランスにおける言語学の発展にとって決定的な 10 年間」として記されている。パリ言語学会で目覚ましい活動、そして 33 歳でコレージュド・フランスの比較言語学の最高権威として迎えられる用意もなされてていたところ、フランス国籍を取得せねばならないと言う条件もあってか、母国スイスのジュネーブ大学の印欧諸語比較・歴史言語学の教授としてふるさとへと帰り、結婚生活が始まる。そしてその時にはフランスの学士院よりレジョン・ドヌール勲章を受けている。

そしてその 3 年後、1894 年 6 月にホイットニーが没しており、11 月 10 日にアメリカ言

[2] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P 33　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

語学者会議で催される追悼大会の為に依頼された「ホイットニーへの追悼文」は、彼ホイットニーを「言語とは恣意(しい)的な契約に基づく社会制度である」という理論をたてた言語学者であり、「従来の言語学の軸を変えた」人として称えつつも、ソシュールの未完の追悼文が提出される事は無かった。その時期以降において所謂「ソシュールの沈黙」が始ったとされる。

ソシュールの有名なジュネーブ大学の講義はその 12 年後、講議Ⅰ（1907/01/16 から、07/03)･講義Ⅱ(1908/11 から 1909/06/24)･講義Ⅲ((1910/10/28or/(29 から 1911/07/04)として進められ、その講義録が没後に纏められたわけである。

ソシュールの懊悩、そしてジュネーブ大学の講義の時期と重なる時期、1906 年初頭になって始まるのがアナグラム研究であり、1909 年当時のイタリアの詩人パスコリに宛てた 2 通の手紙（1909/0 3/19・04/06）を最後にこの研究を中止、ソシュールは喉頭がんによる病死（1913/02/22）に至っている。

③　ソシュールのアナグラム研究

ソシュールのアナグラムの研究は、ギリシャ・ラテン詩 120 冊・ヴェーダ詩 26 冊・サトゥルヌス詩形に焦点が絞られており、ホメロス、ウェルギリウス、ルクレチウス、すべての古典詩とその継承である 19 世紀のラテン詩まで広がっている。

ソシュールはこれらの古代の詩の中に見られる言語音声の響きの中に、詩として表象された意味、文章の流れとは別に、一つの文章の中に、「慣習的・閉鎖的言語コードと記号関係の制約からの逃避もしくは開放」とみなす事ができるとする、詩作の技法と思われる、模倣すべき語あるいはシンボルとしてのキーワード（人名や地名）を、その音声構成要素の断片をちりばめて、その音の響き合いをもって、明示的には述べられていない多義的な意味を表象する詩作上の技法を認め、それをアナグラムとして聞き取っている。

そしてソシュールは「アナグラムを詩作上のひとつの制約とみなし、その形式の存在、ないし伝承・存続を証明しようとしたが、その起源については深く問わなかった[3]」とストロバンスキーは彼の見解を述べている。

そしてこの詩作技法について、「神話的思考が既存のイメージを用いたプリコラージュであるのと同様に、詩人たちはまさしく神話的思考がそのイメージの体系を構成するような

---

[3] ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P222-223　水声社　2006 年 3 月 10 日

やり方で詩作するのではないかと考えた[4]」とは丸山圭三郎は指摘である。古代の伝承詩、碑文などについて「意味と言語音の間（音響との間）の揺らぎ、あたかも語る主体が数人存在して語り合うかの如く響き合い、あるいはベースにメッセージとしての人名等を入れこんでいる」と指摘して、この技法を「文字表記上の変綴りではなく、その音的要素の転倒やちりばめが問題となる」として、アナグラムについて、その特徴を述べている。

③―１　アナグラムの類型

アナグラムの類型は、ソシュールの以下の用語法をもって４種に分けられた[5]、とされる。

1. アナグラム：キーワードがいくつかの単音に分けられて散在するもの
2　アナフォニー：1.の不完全な形
3. イボグラム：キーワードがいくつかの復音に分けられて散財するもの
4. パラグラム：キー・ワードがアナグラムよりも広い範囲、すなわちテクスト中に隠れているもの

「アナフォニー→アナグラム」の違いはキーワード（テーマ語）の明確さの違いであり、「アナグラム→イボグラム」の違いは、分けられた音素が単音か復音かの違いであり、「パラグラム→アナグラム」の違いは、テーマ語を構成する音素を入れこむ、あるいは重ねあわせる文章の範囲（広い狭い）による。

③―２　注目される技法

１・テーマ語（キーワードあるいはテーマ語）：ソシュールのアナグラム研究においては、碑文、伝承などの文章に、一つの象徴的な単語（人名や地域名など）が見いだされるとされ、その「テーマ語」の音声の構成部分の母音・子音が、単音・復音として、ある範囲内の文章中に分散されている。テーマ語はいくつかの固有名詞、或いは当該固有名詞の不可欠な部分に関連のある一つ、ないし二つの語である。文章全体の文脈の流れの中に、テーマ語が埋められている、その響きを、ソシュールは聞き取っている訳である。

２・首座（マヌカン）：アナグラムが聞き取れる文章内には、一つの象徴的な単語（人名や地域名など）、その「テーマ語音声」の構成部分の母音・子音が、単音・復音として分散されて、ある範囲内の文章中に込められているのだが、その前後にテーマ語の頭音と末音からなる特定の語群が存在する。ソシュールはこれを「主座（locus princeps）」、あるいは「マヌカン（mannequin）」と呼び、アナグラム出現の指標と見做している[6]。

３・対化の法則：対母音（contre-boyelle）：アナグラムにおいては、テーマ語の中の分節さ

---

[4] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P172　岩波書店　1989年10月16日

[5] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P172　岩波書店　1989年10月16日　p173

[6] 同上　P173

れた母音は厳密に対を求め、子音においても同様に対をなしており、もしも子音において対を外れた音については、次の文章で補われて対をなしている。母音の総和は正確には偶数であり、奇数になってはいけない。長母音と短母音は別扱い、混同する事は許されない。

・母音連続（母音の連なり）・詩行、詩行の一部分に母音の連なりが同じ順番で、または変化を伴って再び現れる。

・子音連続（テーマをなす子音の連なりは、部分的に例証される[7]）

④　アナグラムの技法とパスコリへの問いかけ

いわゆるアナグラムを、アナフォニー（不明確）～パラがグラム（広い）～アナグラム（単音）～イボグラム（復音）～の流れとして整理して眺めているソシュールだが、アナグラムの文字言語（詩文）の組み立てに際して、古代の詩歌、伝承、神話等の伝承の中においてあらわれている特徴と共通性が認められる詩作であると思われた当時の高名なラテン詩人、パスコリへの質問をしたためている。その中で彼の詩作の様式について、その様式性になる詩作の動機について、意識的か否かという質問を投げかけている。

④―１　アナグラムの技法と詩歌作成者の意図：

もしもアナグラムの技法が、詩歌の作成者が意図的に進める様式であるとすれば、その特徴から、アナグラムを抱える詩作、或いは文章作成の為に、次の手順が指摘されている。

１．「テーマから引き出しうる限りの数多くの音的断片を手に入れる[8]」（P34）

２．音的断片の中から、意図的に要求されるものとして、

①**母音連続**であり、それは同じ順番で、或いは変化をもっていても、同じ母音が再び現れる事が必要。母音は複数個である。

②**子音連続**は、そのために特別な詩行を割り当てる事は、部分的である

3.　脚韻（句末、行末に同じ音を置く事）は決して付随的ではなく、詩行の脚韻、或いは半句の脚韻は配慮が必要とされる。**付随的特徴ではない。（様式性が高い）**― p 34

（各詩行に含まれる母音の総和は、奇数になってはならず、偶数になっている。また単数の場合は、次の詩行が終る前に補填される必要がある）。

「潜在的な〈テーマ語〉が顕在的な詩行と異なるのは、それが収斂・集約された形になっているということでしかない。それはひとつの語であり、いわば展開された詩行をなす諸々の

---

[7] ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P34　水声社　2006 年 3 月 10 日

[8] 同上

語でもある。したがって両者は一と多の違いでしかない[9]」とするスタロバンスキーの解釈は、テクスト全体とテーマ語の関係について「テーマ語は解釈的創作にその実態を与え、そして解釈的創作は引き延ばされた反響（エコー）の形で〈テーマ語〉生き延びさせる。[10]」としている。

④―2 ソシュールのパスコリへの具体的な問いかけ

① 明確にキーワードが現れるアナグラム（単音に分けられている）について示す。
② パラグラムの中で（狭い範囲に分散している）（広くテクスト中に分散している）の対立がはっきりするような､括りの長短がコントラストを見せる 4 ケースを示す。
③ アナフォニーの 3 ケース （キーワードが明確になっているアナグラムの不完全な形）[11]を示してアナグラムの兆候を指摘している。

この問いかけは、パスコリにおいて、この技法は意識された詩作の手法、伝統的な技法の踏襲としてあるという事を、導き出す質問の構成とも言えよう。

④―3 パスコリへの問いかけから伺えること

ソシュールは、パスコリが意識的にアナグラム的手法を用いているとの想定において、次の点を指摘して、示し出していると考えられる。

①アナグラムの中のキーワードについて、最も明確に表れる単純なケースを示している。
②テーマ語が一定の範囲にわたってその構成音素が播種され、あるいは散らばっている、そのありようについて、分かり易い事例と対照的に分かり難い事例を挙げて、アナグラムの諸形（4 例）を示し出している。（パラグラムとアナグラム）
③アナフォニーというべき、多重の声、ポリフォニーがどう表れているのか、その 3 つのケースを示し出している。

※丸山は「文学作品の諸語は先行する他の諸語から生成され、詩の背後の存在するものはコトバを生み出すコトバ、テクストを生み出すプレ（前）テクストである」「言語の既成性を逆手に用いた新た関係の樹立[12]」というのが、ソシュールの出した一応の結論としている。

スタロバンスキーは「ソシュールが知りたいのは、アナグラムという現象、ひいては言葉一般の背後にあると想定しうるような巧妙な構造などではなく、古代のテクストなどを読むときに、自分の耳にはあるひとつの名がどうしても聞こえてしまう。その確信を確固とした

---

[9] ジャン・スタロバンスキー 金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語 P132 水声社 2006 年 3 月 10 日

[10] 同上 P133

[11] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P 175 岩波書店 1989 年 10 月 16 日

[12] 同上

事実として認めて良いかという、あくまでその一点のみである[13]。」という。

⑤　ソシュールのアナグラム研究の意味について

⑤―1 アナグラム研究の意味：下記の指摘[14]、その分類を丸山も踏襲している。

1. 言語の意味の単位「シーニョ」を構成するところの
   シニフィアン（音）とシニフィエ（意味）の相互依存性の破壊
2. シニフィアン（言語音声）の線状性自体の破壊

（エクリチュール（書き言葉）・レクチュール（口頭・話し言葉）について、
書き言葉の二重性（時代や空間を超える作用）をもって引き出される、ポリフォニー性
アナグラムが文字の空間的配置に携わるのではなく音素に携わる[15]

意味形成性の運動過程[16]

⑤―2　アナグラムの特徴とその意味合いについて

⑤―2― i　ポリフォニー性

言語の線状性の制約をはずして、「コード違反によって得られる〈パラグラム〉paragramme 的読解[17]」という読みの可能性を生み出すとともに、言語以前の欲動の世界、夢や無意識の領域にも新たな照明が当てられる契機、との理解が丸山圭三郎のアナグラム理解である。　※〈パラグラム〉paragramme とは「ひとつのアイデアを示す」単位

「言語化以前の欲動の世界」（自然）と「構成された構造」（文化）の間を絶えず上向・下向運動を繰り返しながら、クリステーヴァの言うル・セミオティークの再活性化によってル・サンボリークな体系の再布置化を可能にさせる[18]」「ソシュールの考えたコトバの本質は、まさにこの《意味形成性の運動過程》の他ならない。」「言葉と無意識の領域の法則に新たな照明が当てられる契機となったと言えるかもしれない。」という丸山の言である。

この内容は、音声言語の線状性の破壊と言う理解なのだが、ポリフォニーと言うべきシニフィエアン（音声）の重なり合い、ポリフォニー性の指摘とも受け取り得るであろうか。

13　ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P224　水声社　2006 年 3 月 10 日

14 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P176　波書店　1989 年 10 月 16 日

15 ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P58　水声社　2006 年 3 月 10 日

16 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P176　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

17 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P176　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

18　同上

⑤―２―ii　テーマ語（キーワード）

テーマ語とは、地名、人名など、そうした心的イメージを抱いているのだろうか、その構成する音の断片が、一定の規則性をもって碑文等の伝承の文章の中に入れこまれているのが、アナグラムである。言語表象の中のベースにある、集団的な情念であろうか、そのテーマ語、何だかのシンボルを構成する語、その音節・音素（母音、子音、単音、復音）が、一つの文章、或いは文章をまたいだ範囲にちりばめられている古代の碑文、伝承、神話等において、この散りばめられ方、その技法に厳密な法則性を認めたソシュールは、そのポリフォニーと表現される、音声の重なり合いを、文章の中から拾いだしている。その文章に、ある響きを醸成しつつ、詩文、碑文、伝承や神話等が進行する様態について、ソシュールはアナグラムとして捉えている。

アナグラムのテーマ語、あるいは象徴語について：

碑文・伝承等の文章において、あるテーマ語を構成する音節（母音、子音）が、詩文の中に分散されており、ある範囲にテーマ語を構成する音声が散らばりつつ、文章を構成しつつ進行する事をソシュールは聞き分ける。その文章の各部分にテーマ語を構成する音素（単音・複音）が散りばめられつつ、ひとつの碑文や伝承等が進行している。

散りばめられたテーマ語の音声の単位を拾い上げると、詩に表現される文脈の中に、もう一つのメッセージ、印象、テーマ語が重なり合って響くという事を、アナグラムの技法として、アナフォニーとしての重なり合いが見いだされるとして、ソシュールはこれをアナグラムとして、言語の線状性の破壊によって、複数の話者の声を響かせるとしている。

⑤―３　第一資料の実働化[19]について：

スタロバンスキーの第一資料とは、言説（ディスクール）に先立つ、先行する言説であり、「個々別々の概念[20]」としており、それは様々な概念（言語的形態を纏っている）であり、「たとえば牛、湖、空、赤い、悲しい、五、割る、見る、など」としている。「ソシュールの大胆さはこの抽象物を具体的資材として第一次資料として扱う点にある。」とする。

第一資料とは「象徴」という用語で指示されている。この実働化とはそれらが絆づけられ、言語の特性（思想の 161）に係わって「言語記号にのみ見られる《恣意性》と、言語が自ら作り上げたコードを絶えず突き崩し、新たな意味体系を形成していく《ディスクール活動》に存する[21]」とは丸山の説明である。これは記号的な「2 項対立関係」、on/off では落とし切

---

[19] ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P29　水声社　2006 年 3 月 10 日

[20] 同上　p 23

[21] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P 161　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

れない複雑系なのか、それ以前の意味形成の渦中、複数の言主体の交錯、揺れ、あるいは言語表象に先行するディスクールが想定され得る、そうしたポリフォニー（集団意志も含む）性とも受け取り得る、どちらの傾向であろうか？

⑤―４　近代的自我と言語表象

また集団表象と個人表象とが混然一体的に推移するような時間性を想定するならば、複雑系的な言語表象側の概念性を言語活動の以前に想定する事は、近代人的自我作用を前提にしてすすむ議論と言うよりは、むしろ自然生物性と共にある（自己保存と自己複製の衝動）が覆いつくすといった「生の衝動」のなかにあるとも思われる。

言語的な意味の創出過程は、on/off へと返還される「差異の二項対立関係」による差異の関係を構成しての、その「差異の感興」「差異の二項対立関係」の重なり合い、その結果、あるいは延長上の重合状態を想定できるとすれば、たとえば象徴機能・概念形成、社会文化性への移行過程、その経過において集団帰属への願い、交流への願い、その実践課程たる言語的コミュニュケーション・その敷衍・社会的構築が続くものと想定され得る。

近代的自我作用を前提にする言語論の構成に対して、互いに重ね合う、集団表象と個人表象の混然一体の音声言語の表象過程、歴史経過、時間性を想定するならば、その始まりとして各々の「差異の 2 項対立関係」への気付き、差異への感興、意識に届くという状況、その重合過程としてのポリフォニーの響き、との理解もありえようか。

そして一つの「シーニョ」の創出過程としては、音響と意味を繋なぐ絆という表現には、言語的意味はあたかも名称目録に記載される概念であるかのようにアプリオリに存在していると言う概念性が前提にあって絆が結ばれるのではなく、音素の組み合わせもまた、次第に集団的に構築されるところの、揺れ動きつつ意味の範囲も、音素の配列関係、その数までもが、動きつつ浸透し、敷衍し、集団的に構築されつつの概念性、言語的意味、音素配列関係、その動態として、その表現としてのアナグラムとして想定されないだろうか。

⑤―５　対化の法則に関連して

ソシュールは「神は偶数（対になる数）を喜ぶ[22]」として、アナグラムにおける、対化の法則を認めている（母音も子音も対を成して詩行を形成しつつ、テーマ語を組み込む）。その上、一つの文章が奇数の音声で終わる場合は、次の文章において、補償をすることが、例外なく認められることについて、「神は偶数（対になる数）を喜ぶ（NUMERO　DEUS

[22] ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語　P32　水声社　2006 年 3 月 10 日

GAUDET)」として、この発見への驚きをしるしている。「対化の法則[23]」は、各詩行の内部で一度使われたあらゆる母音・子音がさらにもう一度使用される　頭韻は偶然の反響（エコー）ではなくなる事を指摘している。..

対化の法則の中の母音：偶数回あらわれるのだが、　諸々の母音は正確に対をつくっていて、偶数個であり、詩行の音節が奇数の場合、半端な母音が出て来ても次の文章で補う。
対化の法則の中の子音：母音と同様に、奇数の場合は次の文章で補填される。それはつねに偶数個あらわれ、ソシュールは「神は偶数（対になる数）を喜ぶ 」と一冊のノートに大文字で記して、感動、衝撃を表している。

⑥　アナグラムへのひとつの解釈

①　⑥―１　ポリフォニーについて

ランガージュの作動について：言語的意味の表象側・解釈する側の双方向的なランガージュの駆動を想定し、その集団的な音声表象の記憶・残照として、アナグラムを捉える事ができるとすると、集団内言語表象者、その意味を聞き取り反芻する人々において、その頭韻、脚韻で囲まれた、言語音声のポリフォニー的な集合体（アナグラム）は、一つの言語集団において、象徴的な語彙（地名・人名など）が音素配列集団（原シーニョ）として収斂していく経過、その集団表象の時間経過、記憶としてのアナグラムが想定され得ると思われる。（ポリフォニーそのものであり、そうあらわれる。）

> ※一つの言語表象が、聞き手によって反復され、表象者と聞き手の対が形成され、その経過が習慣的な言語音声配列を獲得しつつ、一定の音声配列の単位「シーニョ」として母国語集団的に構築される経過があって、その過程の記憶としての、音声を発する話者達と聴き手達が対を成す（言語表象者とそれを反復する意味理解・意味重ね合いのための反芻行為）状態、その形式の記憶として想定できないだろうか？
>
> （対をなすのは、ランガージュの双方向的駆動の渦の中にある、集団の言語音発声側と聞き取る側の対として、その重なりあいの中のポリフォニー状態として想定できないのだろうか？）

⑥―２　テーマ語とポリフォニー性について

表象される詩文等において、テーマ語のスタートの音素（頭音）、そして最後の音素（末音）が、他の音声の中で、際立った音として取り込まれているのは、次第に「シーニョ」として、その集団の集団幻想、集団願望的な観念・欲求などを示す音声表象として想定する。

23　同上　P29

たとえば温暖な気候、豊饒な食糧などとの邂逅、その安らぎ、その状況下で様々な言語表象が、叫ばれる、その記憶の中の土地、人名などのイメージとして、様々な言語音声が叫ばれ、あるいは表象され、交錯する経過の重なり合いの中で on/off の形式をふんで一つの「差異の二項対立関係」に係わる集団的な感興・衝動がインプットされる、その状況が集団的な記憶として残存するなどが想定され得る。それらは集団表象としての神話・伝承・詩歌朗詠などの集団的朗詠において、表象され聞き取られ、集団的な記憶として集約され、伝承される形式性としての、神話、伝承、碑文などに、様式化されて、残存していると想像する事も出来るのではないか。..

それらは文字の発明をもって、音声言語のコミュニュケーション過程、言語使用過程として、音声による言語表象に対して、文字言語は寸時に消えることはなく、時空を超えて読解されるところから、時空は凝縮されて、より時空を超えた集団表象として、言語表象のポリフォニー性、その経過が顕在するものとして、碑文・伝承・神話等の中の言語音表象を形作ると想像する事も出来るのではないか。..

アナグラムは、個人における言語実践というよりは、集団的な「シーニョ」の構築過程、その協働的な意志と言おうか、願い、歓喜、恐怖、その弛緩などの音声表象として、それらの集団的な敷衍、浸透の過程の記憶として、言語表象側、聞き取る側が対を成して、時を経過してゆく、その集団的なポリフォニー状態としてあり、それを言語音声の発語主体の言語音表象上の性質、線状性の側からながめるならば、線状性の破壊（ポリフォニー性）という文脈として解釈できる、その解釈を抱えるのではないだろうか？

集団表象的な言語表象(叫び等)においては、言語的コミュニュケーション（言語音表象者と言語的意味の受意者―話し手と聴き手の相互作用関係）は一体的、あるいは言語を表象する側側と意味を受け取る側の心的位相は同一平面と思われ、双方の意味理解の様態としては、一体的であろうと想定され、それがポリフォニーでありつつ、一つの言述として表彰される所以であろう。その集団的な音声言語表象の過程を、文字言語による表象において、アナグラムを呈するとして聞き取られ得ると想定されないだろうか。(伝承・神話・碑文など、語り手・聴き手達は、共に語り共に胸に落しているような状況、その表象としてのアナグラムと思われる。）..

まとめ

音節すべてを盛り込んだアナグラム：「伝統的なアナグラムは文字記号とともにしか作用しない[24]」とされ、たとえばあるシンボル的な「原シーニョ」「テーマ語」は生成過程に

[24] ジャン・スタロバンスキー　金澤忠信訳『ソシュールのアナグラム』語の下に潜む語

おいて、これ自体が揺れているとして想定できるとすれば、それをかみ砕き確かめ、反芻するところの集団表象としてのアナグラム、そうしたテーマ語を想定できるとすれば、次第に生まれつつある「シーニョ」、あるいは「シーニョ」の誕生過程、形成過程を映すところの集団表象の様態、それに対応するアナグラムのポリフォニー的な響きとして想定できないのだろうか。（**意味形成性の運動過程**[25]）..

ソシュールの言語論において、ラング（言語）の倉庫に取り込まれるという表現の言語的意味の単位である「シーニョ」について、個人の言語表象・母国語集団的なレベルでの表象・その複合的形態として、次第に集団的な構築の過程に取り込まれてゆくという事態を想定できるとすれば、それが初期の言語の集団使用、コミュニュケーション過程であり、それは on/off の形式、大脳神経伝達物質の反応機序として取り込まれつつ定着する、その経過を伴いつつ、心的にはその記憶として、言語体系の複雑化・肥大・変換過程に至る、「「シーニョ」の誕生過程、関与的と言う表現に当てはまる所へ落ちる、あるいは大脳機能に官能基の移動として理込まれるところ迄、その経過を記すアナグラムとして想定されないだろうか。

「第一の恣意性」において「シーニョ」の「音」と「意味」の絆は無意識からの指定として一体的でありながら、一つの「シーニョ」の構築過程を想定すれば、その「音」は母国語集団的にポリフォニー的に浮かび上がる音響イメージとして、集団的な「音声」の重なり合いとして、これを一つの音素配列関係としてやがて一つの「シーニョ」へと収斂するといった、「シーニョ」の誕生過程を想定できないだろうか。

「音」と「意味」の絆は無意識の指定において決定するとされるのだが、その「文化的化石[26]」とされる完成度にもかかわらず、各「シーニョ」の音素配列関係とその近似・近接する音素配列、たとえば「前シーニョ」的、その音響イメージにおいて、それぞれの「シーニョ」の誕生過程は、「テーマ語」を構成するアナグラムの様態がなぞるがごとくに、「シーニョ」の抱える「音」は次第に配列関係を構成しつつ、その音の揺らぎは「意味」との間でも揺らぎつつ、そうした経過の残照としてのアナグラムと想定する事はできないのだろうか。

言語的意味の創出はその始まりから、近接概念、近接音素配列関係との間で、差異の関係を採りながら生成されると想定されないのだろうか。文化的化石として、緊密な絆を抱えてラング内に格納される「シーニョ」でありながら、その構築過程においては、近接する音と意味の間で揺らぎ得るところの「関係概念としてのシーニョ」、その生成過程が想定され得

P38　水声社　2006 年 3 月 10 日

[25] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P 176　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[26] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P201　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月

るのではないだろうか。

アナグラムの記憶は、「シーニョ」の誕生過程の記憶を、ポリフォニーの様態を、線状性の拘束の中で表現された文字言語の表象において示していると想定できるとすれば、アナグラムの傾向は、母国集団の人々が心に刻まれた「差異への感興」の音声表現の記憶、その記憶を集団表象としての碑文・神話等の伝承のなかに残された、「シーニョ」の醸成過程、音と意味の多重層的な重な合わせ（ポリフォニー)、その痕跡として想像され得るのではないだろうか？

第一の恣意性と第二の恣意性は、人間の脳機能の同一現象・機能としての、人間の言語能力（ランガージュ）の駆動形態（人間の精神機能)、ランガージュの動態の在りようとして共通的であり、その抱えられている特徴を「恣意性」として表現されていると考えられよう。そして第一の恣意性は、「シーニョ」の意味が「無意識から指定」されている絆によって音声配列の様態とは一体的なのだが、それは「シーニョ」の「シニフィアン（音)」・音声のゆらぎのなかで、やがて「文化的化石」として、音響イメージに沿うて意味が配分され、やがてラングの体系に取り込まれる（関与的）という経過が引き続く、その経過についての「遠い記憶」、**「意味形成性の運動過程[27]」**として想定され得るのではないだろうか。(2022/905)

⑦　追加の章（2023/03/08）
音響象徴性が人類において獲得される経過、それはアナグラムの読解についての、ソシュールの研究の内容が関与する可能性があり得る事が想定され得るのではないか？

アナグラムにおいて、ポリフォニーとされる言語音を表象する複数の動き、動態において、集団的に取捨選択されつつ、ひとつの「シーニョ」における「シニフィアン（音)」と「シニフィエ（意味)」の絆が定着する母国語集団における集団的な言語音（叫び等）の交錯を想定する。その状況において、言語的意味と言語音が絆づけられる、その経過において人間の精神機能の動きは恣意・自由であろうから、その様態の中から、「言語の第一の恣意性」は必然であり、人間の精神機能の動態、恣意性を体現していると思われる。

27